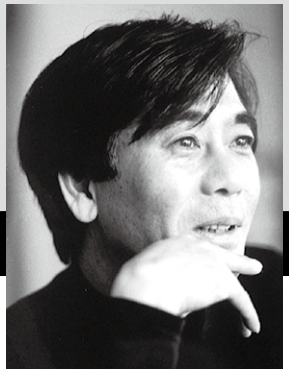

作家
元国際線乗務員
黒木安馬

【プロフィール】高校時に米国留学後、早稲田大学を経てJAL国際線客室乗務員として30年勤務。世界初の「カラオケ・フライト」や「1万メートル上空・北島三郎機上コンサート」などを実現させる。千葉の自宅は1300坪の山林を開墾してプール、テニスコート、コンサートホール等を手作りする。現在、㈱日本成功学会社長として自己啓発や社員教育で講演中。著書に『成「幸」学』（講談社）、『あなたの人格以上は売れない!』（プレジデント社）、『出過ぎる杭は打ちにくい!』（サンマーク出版）、『面白くなくちゃ人生じゃない!』（ロングセラーズ）、『リセット人生・再起動マニュアル』（ワニブックス）、『小説・球磨川』（上下巻・ワニブックス）などがある。 E-mail:yasuma@myad.jp URL:http://www.3percent-club.com

21世紀だ！――――人生・農業リセット再出発 147

土龍!?

昔々、春も待ち遠しい節分の夕方、キーンと凍りそうな澄み切った星空に天の川が流れ始める。子供たちは大きく束にした麦ワラを荒縄で幾重にも縛り、バットみたいなものを楽しそうに作った。日没後、村中の家の庭先で地面をそのワラ棒で叩くと、おばさんがキャラメルや餅をくれるのだ。農作物を害するモグラを追い出して五穀豊穣を祈る神事である。ドイツ人乗務員から自分の国にも同じ風習があると聞いて驚いたが、キリストの光に盲目のまま悪さをする魔性だからだという。

モグラは掘った穴の跡が龍みたいだから「土龍」と書き、「地龍」はミミズを指す。ヘルメットを被ってドリルを手にしたモグラの工事標識は可愛くも、その一方で穴が水田の水漏れや農作物を枯らすなどの被害を起こす。盛り土を埋めても「次は向こうで」とばかりのやりとりはまるでモグラ叩きゲームだが、実はモグラは先祖から受け継いだ地下道路網を増改築しているだけであり、そこをミミズを食べるための狩猟用の罠にしている。肉食で植物の根や実は食べず、運動量が豊富で大食漢。独身生活でライバル闘争が激しく、トンネル網には１匹が棲み、昼夜活動して３時間の休息と５時間の活動、８時間×３単位のリズムがある。12時間以上、何も口にしないと餓死する。そのため、餌不足対策として唾液の麻酔成分で獲物を噛んで仮死状態で貯蔵しておく習性を持つ。

では、モグラ退治には何が効果的なのか？　我が家でも芝生がボコボコになるので知恵を絞る。家庭菜園程度であれば、深さ30㎝の溝を掘って金網で囲えば万全。ペットボトルを利用して作った風車は音と振動で嫌がると聞くも、高価な超音波発振機と同様、数日で慣れてしまって効果なし。真っ暗なトンネルの中、盲目なのにミミズを捕食できるのは嗅覚だと耳にし、安くはない市販の忌避剤を穴に詰め込んだが、あくる朝には盛り土と一緒に嫌味ったらしく外に放り出されていた。捕獲器をトンネルに埋めてみたところ、近くに新しい盛り土ができるばかりで馬鹿にされるだけ。ならばと、木酢やウジ虫殺し用クレゾールなどを混ぜ合わせた自作の“特攻隊液”を穴に流し込んでの水攻め！　大成功かに見えたが周辺のみだった。バイクの排気ガスをホースでつないで穴に突っ込んでトンネル内をいぶすことが効果的との情報を得る。なるほど、今度は毒ガス攻めだな。あちこちの穴から煙が漏れてきた。これで全滅か。しかし、翌日には新鮮な場所に盛り土があった。

そこで、ふと考えた――こんなことを毎日やっているとミミズが先にいなくなってしまうのでは？
モグラが出るのは餌のミミズが豊富だからこそであり、庭に放し飼いにしている数十羽の鶏の糞のお陰で有機質に富んだ肥沃な大地になってミミズも増え、芝生が青々と育ち、モグラが喜ぶ。とすれば、『進化論』を書いたダーウィンが言うように、ミミズがいなかったら地球は滅ぶだろう！の通り、土壌が豊かな証拠である。ヨトウムシやコガネムシの幼虫をどんどん捕食し、どうしようもないやせた土地には棲まないモグラ。踏み固められて窒息しそうな大地を耕して新鮮な空気を送り込んでくれていると受け止めれば、魔性どころか、天の川からやってきた救世主の住人かもしれない。宇宙船地球号は、人間だけのものではない。万物の命の権利を考えれば、共生こそが平和。良い日、悪い日、それは全部、自分の心が作り出す。思考回路を変えてあるがままの大自然に任せ、モグラと戯れながら気楽に生きるのもまた贅沢な人生か。